

生徒の新たな面を見付けて褒め 生徒自ら設定した上限を取り払う

三重県 四日市市立楠中学校

一小一中では、生徒同士の気心が知れている半面、評価や役割が固定し、生徒は今以上の何かを求めて行動することが難しい。四日市市立楠中学校では、そうした状況を打破しようと、学年団、全校で生徒を見取り、連携しながら声を掛けることに注力する。

私と生徒とのかかわり方

いつ、どのように褒めるかが、やる気をつなげる鍵

佐藤正倫校長

複数の教師で生徒を見取り、
新たな良い面を逃さず見付ける

本校は全校生徒320人。いわゆる一小一中で、隣接する四日市市立楠小学校の卒業生がそのまま、本校の生徒となります。生徒は互いに気心が知れていて仲が良い半面、なれ合いの活動になりがちで、リーダーもなかなか育ちません。全ての生徒が感動する学校を

つくっていくためには、教師の力で生徒を動かすのではなく、生徒たちが自らの手で企画運営し、実践することが大切です。

私は、生徒一人ひとりが互いの違いや良さを認めた上で、目標に向かって主体的に頑張る姿勢を、中学校卒業までに養いたいと考えています。担任だけではなく、いろいろな教師の目で生徒の新たな良い面を見付けて伸ばし、自信を付けさせる。そして、学習だけで

School Data

◎ 1947(昭和22)年開校。鈴鹿川の河口にある楠町に位置する。目指す子どもの姿は「自分を愛し、一人ひとりの違いを認め、未来に輝く子ども」。生徒の良さを認め、生徒の力を信じ、生徒の目線に立った教育を目指している。



校長◎ 佐藤正倫先生

生徒数◎ 320人 学級数◎ 11学級(うち特別支援学級1)

所在地◎ 〒510-0103 三重県四日市市楠町北五味塚 2092

TEL◎ 059-398-3132

URL◎ <http://www.yokkaichi.ed.jp/kusuchu/>

公開研究会◎ 未定

なく、あいさつや掃除といった生活面での学びも大切にし、生徒を多面的に評価することで、学習面と生活面の相乗効果を図ろうとしています。

校長としては、生徒との距離感を保つことも大切です。日常的に生徒一人ひとりに声を掛けるといっても、行事などの節目に、生徒全員、学年全体や生徒会に良かった面を伝えるようにしています。

本校では、大きな行事の後には生徒会役員が校長室を訪れ、成果報告をするのが慣例となっています。6月に行われた体育祭の報告に来た際は、「今年の体育祭は生徒会として

生徒の心に火をつける



写真 行事後は、生徒会役員が必ず校長室を訪れ、成果を報告する。その時は、生徒を褒める絶好のチャンスだ。佐藤校長は、生徒が自ら頑張った、成功したと思っている点を聞き出し、重点的に褒めた。また、このやりとりを若手教師が見て、指導法を学ぶ場にもなっている

何が良かった？」と切り出し、生徒の考えを引き出しました。「体育祭のテーマが良かった」と生徒が答えると、「そうだね。最初は『飛翔』というキーワードだけでしたが、『昨日の自分を越える』というサブテーマを付けたことで、更に分かりやすくなりました。あれは良かった！」と生徒に共感し、良い点を具体的に挙げて褒めます。空気が和み、「幼稚園児とのダンスはどうでしたか？」と更に問い掛けると、「楽しかった！」「かわいかった！」と生徒はとても良い表情をします。このようにして、体育祭の充実感を改めて全員で共有した後、「良い体育祭にしてくれて本当にありがとう。次の文化祭は2年生が中心

かな。体育祭を経験しているから、きっと良いものになると思う。3年生は勉強を頑張る時期だけど、後輩にアドバイスすることも大切だよ」と伝えました。

生徒自身が一番頑張ったと思うところを引き出して認め、具体的に褒める。そして、次の目標にも言及し、やる気をつなげる。ただ褒めれば良いのではなく、どういうタイミングでどのように褒めるかが重要だと考えています。

また、ボリュームゾーンである中間層の生徒全ての意欲を高めることは難しいですが、授業でも行事でも生徒の意見を大切にし、生徒自らが活動できるようにすることが、何よりも大切だと思います。

若手教師へのプラスワン研修で 生徒へのかかわり方を伝授

本校の教師は平均年齢39・8歳で20代が8人と若手教師が多く、生徒のやる気を引き出すには、教師の育成が欠かせません。以前は、先輩教師の指導をまねたり、自主的に集まって議論を交わすなどして、生徒への向き合い方を自然に身に付けていましたが、今の若い先生は、このような方法で学ぶ経験を学生時代にしていません。そこで、「プラスワン研修」と称して定期的に若手教師が集まる会を開き、テーマを決めて生徒への声掛けや褒め方などを学ぶ場を設けています。



四日市市立楠中学校校長
佐藤正倫 さとう まさみち
「授業でも、その他の活動でも、生徒の笑顔が一番大切」



四日市市立楠中学校
井上弘之 いのうえ ひろゆき
3学年主任。数学科担当。「褒める時も叱る時も、常に生徒に本気で向き合うこと」



四日市市立楠中学校
上原啓江 うへはら あきえ
3学年担任。国語科担当。「生徒がすぐに諦めてしまわないように、丁寧に対応していきたい」

例えば、家庭訪問前には、スクールカウンセラーを招き、保護者との話し方を含めたポイントを話し合います。また、合唱大会前には音楽の教師が来て、各クラスの良い点を伝え、アドバイスをします。これにより、教師は合唱の練習時に生徒を褒めつつ、指導も具体的に出来ます。そして、「プラスワン研修」をきっかけに、生徒会役員と私が面会する時などに、生徒に同行し、私が何を伝えているのか、そのポイントをメモするなど、熱心な若手教師の姿も見られるようになりました。

教師が学び合う環境づくりが、結果として教師のチームワークを高め、生徒を複眼的に見て、その良さを引き出すことにつながります。こうした環境づくりは校長の役目だと考えています。

褒める時も叱る時も、生徒に本気で向き合う

3学年主任／数学科担当 井上弘之先生

教師間の情報共有と「見ているよ」というメッセージが生徒を変える

学年主任を務める3年生は3クラスあり、学年団は担任3人、副担任2人、学年主任1人の計6人です。担任のクラスだけでなく、6人で約100人の生徒を見るという意識を常に持ち、チームワークを大切にしています。

この学年の入学時には、生徒の人間関係に課題がありました。そこで、まず行ったのは、「叱る基準を学年で統一し、生徒にきちんと伝えること。叱る内容は1つに絞ること」と、「生徒の良い面を見つけたら教師間で共有し、褒めること」です。

生徒の中に、教師に対する不信感が強く、学習意欲が低い者がいました。その生徒はノートの取り方が丁寧できれいだったので、授業中にあらゆる教科の教師が「きれいにノート書けているね」と声を掛け続けました。部活動の顧問にも話し掛けてもらうようにするなど、複数の教師の目で見守ると、生徒の学習意欲が徐々に高まり、心も開いていきました。生徒一人ひとりにこうしたアプローチを続けるうちに、生徒の人間関係の課題も解

消していったのです。生徒自身が大人になったこともありますが、「大勢の先生がいろいろな面からいつも見てくれている」という安心感が、生徒の自己肯定感を高め、互いの良さを認められるようになったのではないかと思います。

学年全体で良いところを見付けるため、学

私と生徒とのかかわり方

生徒一人ひとりの課題に丁寧に対応する

3学年担任／国語科担当 上原啓江先生

生徒一人ひとりの課題ごとに声掛けやアプローチを変える

本校の生徒は、頑張ろうという気持ちがある

半面、「まあ、いつか」「そこそこいい」など、諦めの早さや甘さが気になります。例えば、論述問題では、自分にはどうせ出来ないと思いついて、手を付けようと思わない生徒が少なくありません。私は、単語しか思い付かないという生徒には、「その単語と単語をつなげてみたらどう？」とヒントを出したり、

年集会で「自分のクラス自慢」を学期ごとに行っています。ここで生徒は「黒板が学年で一番きれいだ」など、教師に褒められたことをよく自慢しています。教師に褒められ、認められたことが、生徒の自信につながっているからでしょう。しかし、生徒のやる気に火をつけるのは一筋縄ではいきません。褒めるだけでなく、時には厳しく叱り、教師が嫌われ役になることもあります。そうした時でも、生徒を頭から否定するのではなく、「何とかしたい」という思いで本気で向き合うと、生徒には必ずその思いが伝わると思うのです。

「ここはどう思う？」と質問をし、答えが返ってきたら「そのことを書いてみたらいいよ」とアドバイスするなど、生徒個々の課題に丁寧に対応することを心掛けています。

また、宿題には漢字の書き取りや意味調べを課すことが多いですが、例えば、漢字の書き取りでは「はね」や「止め」など細かい部分までチェックし、評価に反映しています。なぜならば、「少しぐらいなら許される」と思わずに緊張感を保つことも、生徒のやる気を引き出すには大切なことだからです。

生徒の心に火をつける

厳しく接する一方、わずかな成長も見逃さずに、「提出物をちゃんと出せたね」などと褒めるようにもしています。休み時間は出来るだけ教室で過ごし、授業中に褒める機会がなかった生徒にも声を掛けます。テレビの話などの日常会話からも生徒の様子をつかみ、「どのような言い方をすれば、生徒に響くのか」を常に考えています。

1対1で話す方がよい生徒、友だちとグループで話している輪の中に教師が入って、いつか話すがよい生徒など、さまざまなた

学校全体の取り組み 掃除やあいさつなど地道な努力が学び続ける力に

人の役に立つことの 大切さを伝える「志授業」

ここ数年、同校が力を入れているのは、「人のために何が出来るか」を考えることだ。それを起点として、自分の得意なこと、好きなことを見付け、自己肯定感を高め、将来の目標につなげようとしている。

取り組みの軸となるのは、2012年度に始めた、年1回の「志授業」だ。12年度は、NPO法人「岐阜立志教育支援プロジェクト」の井上武理事長を招き、「夢に向かって」というテーマで講演してもらった。

イブの生徒がいますので、それぞれの様子を見て、アプローチを変えています。話すことが苦手な生徒には、「スマイルノート」という、次の日の予定と今日の感想を書いて提出するノートを介してやりとりをしています。

生徒と教師の相性もあるので、どの生徒にも私の言葉が響くとは限りません。他の先生に相談して声を掛けてもらうなど、チームで生徒を見ることを心掛けています。また、声掛け自体が響かない生徒も含め、全員同じ意識で諦めずに声を掛けるようにしています。

講演は、井上理事長の「皆さんは自分の人生経営の社長です」という働き掛けで始まった。そして、「社長就任の資格は志を持つこと」と話し、金メダリストの高橋尚子氏や、真珠王・御木本幸吉氏などのエピソードを織り交ぜて、「自分の好きなことや得意なことで、人のためにどう役立つのか」という目標を持って生きることの大切さを伝えた。また、志を実現するには、普段の生活をきちんと行うことが大切であり、「掃除」「あいさつ」「感謝の気持ち」の3つの大切さを強調した。

佐藤校長は、「『志授業』で述べられていた、掃除やあいさつ、感謝の気持ちを大切にすること、人のためになることを見付けることなどは、すぐに学習意欲に結び付くものではないかもしれませんが、しかし、地道に努力することは、学び続ける力を身に付けるには必要ですし、社会に出ても欠かせない力です。そして、人のためと思うからこそ、目標に向かって頑張れることもあります。すぐに数字で見える効果が出なくても、生徒が少しでも前向きに変わっていくための材料の1つとして、続けていきたいと考えています」と語る。講演の感想文を見ると、生徒にも校長の思いが伝わっていることが分かる。

井上先生と上原先生も、「学習と生活のどちらも大切にすることで、生徒を褒める領域や接点が広がり、褒める量も増えます。また、中学校時代は、中には努力をしなくてもテストで良い点数が取れる生徒もいますが、半面、努力をする経験はどうしても少なくなります。そうした生徒にとっても、掃除やあいさつなど、地道な努力を経験することは『学び続ける力』を身に付けるためには大切なこととです」と口をそろえる。

「志授業」は、12年度は1・2年生の生徒と保護者が対象だったが、13年度は小学6年生とその保護者も招き、11月初旬に行う予定だ。今後は、小学校・中学校だけでなく、保育園・幼稚園も連携し、地域一体となって「一人ひとりの違いや良さを認め、人の役に立つ志を持った生徒」の育成を目指していくという。